

「今日は、スポーツについて大いに語ろう。」

～スポーツ医科学の現場が語るスポーツの現在と未来～

このたび西高視聴覚ホールにて、第 16 回西高フォーラムを開催いたしました。今まで 2020 年 6 月・2021 年 6 月・2021 年 9 月と直前のコロナ緊急事態宣言により 3 回にわたって延期となりましたが、ようやく 3 年ぶりに開催することができました。この西高フォーラムは、一般財団法人西高会と西高同窓会の共催による文化活動のひとつです。近隣の一般市民の方々も対象としたシンポジウムで、このイベントを通じて地域との交流・地域への社会貢献も目的としております。今回は新型コロナウイルス感染症蔓延のため残念ながら西高関係者のみへの案内となりましたが、西高生・同窓生・保護者のかた約 130 名にお越しいただきました。

<中山修一(42 期): J R 東京総合病院整形外科・日本バスケットボール協会 スポーツ医学委員>

西高時代の自身の怪我・手術を契機に、スポーツ医学を志す。現在では整形外科の中でも膝関節とスポーツ整形外科を専門として担当し、平日は週 3 日の外来診療と週 2 日手術をこなす。週末にはスポーツ医学のフィールドワークとして、バスケットボール・アメリカンフットボール・フェンシング・競馬(馬ではなく落馬した騎手)・フットサルなどの領域で救護活動・健康管理・アンチドーピング活動を行う。スポーツの国際大会には日本代表選手団のチームドクターとして多くの地域へ帯同し、世界の中の日本を意識するようになる。

<土屋潤二(40 期):日本オランダ徒手療法協会 代表理事>

大学サッカー部時代の経験から「スポーツ科学を応用してパフォーマンスを上げること」に興味を持ち、ドイツへ。留学中オランダサッカー協会ですぐに手術後にトレーニングをしながら復帰させるリハビリに衝撃を受け、オランダへ。日本人で初めてオランダの国家医療資格を取得し、プロサッカークラブでトレーナー業務をスタート。現在、フィジカルトレーニングとスポーツ医療を専門に行っている。スポーツにはいろいろな関わり方があり、また成果を上げる方法に限界をつくってしまうのは意外にも自分/チームであることを伝えたい。

<岡田 隆(50 期):日本体育大学 教授・元柔道全日本男子チーム 体力強化部長>

2016 年リオ五輪で柔道男子全階級メダル制覇に貢献。日体大ではボディビルダー・トレーナーを育成。計画立案・厳しいトレーニングと減量のボディビルは、身心を鍛え得るとして学生指導の核に。全日本学生ボディビル優勝者輩出。自身もボディビル競技で成績を残す。身体作りの知識普及のため、骨格筋評論家「バズーカ岡田」としてメディアで活躍中。「除脂肪メソッド」ほか著書多数。YouTube チャンネル「バズーカ岡田の筋トレラボ」運営。世界で戦う柔道家・365 日 24 時間筋肉に向き合うボディビルダーの執念は、どんな業界でも成長の原動力になる。

<阿部さゆり(54 期):PRI Japan 代表>

高校卒業後の 2002 年 5 月に、渡米する。以後アメリカでアスレティックトレーナーを学び実践し、教育に従事していたらあっという間に 16 年が経過していた。スポーツの現場はアート&サイエンス-イメージを体現することに突出したアスリートに、科学的根拠(エビデンス)に基づく基盤は何が提供できるのか?アスリートの健康や安全管理などについて、私達が日々追及していることとは。

<野村由実(55 期):千葉工業大学創造工学部教育センター 助教>

学生時代はアメリカフットボール部のアスレティックトレーナーをしながら、膝前十字靭帯損傷の予防や手術後の筋機能・動作特性について研究。2016 年からは、日本スポーツ振興センターで東京オリ・パラに向けた競技力向上事業のコーディネーターとして国際大会の現地調査・中央競技団体の強化戦略プランの立案支援に従事。出産経験から産後の心身変化に対する社会認知・方策不足を知り、「産後の心身の回復と怪我からの競技復帰はどちらも Reconditioning が大切」という考えに至る。現在は「産前・産後女性の健康と身体活動」をテーマに教育・研究活動を行っている。